

# 教育論の中の大正生命主義

——小林秀雄と芸術教育論——

有 田 和 臣

## 〔抄 録〕

大正期の教育論にあらわれた特徴のひとつとして、「生命」をキーワードとする論調がある。これは「大正生命主義」と呼ばれる思潮の流れの中に、当時の教育論も関与していた事実を示している。この、大正期に興隆を見せた教育論、とりわけ芸術教育論に見られる「生命主義」が、小林秀雄の初期批評に影響の痕跡を残している点、さらにそれがニーチェ思想との関連も持っている

点を確認し、小林の批評が大正生命主義の思潮の流れを汲んでいる可能性を検討する。

キーワード 日本近代文学、大正生命主義、教育論、ニーチェ思想、小林秀雄

## 1

「大正生命主義」の定義を確認する。この名称の核にある「生命主義」の概念について鈴木貞美氏は次のように説明している。

「生命主義 (vitalism)」とは、思想一般において、「生命」という概念を世界観の根本原理とするもので、一九世紀の実証主義に立つ目的論・機械論による自然征服観に対立する思想をいう<sup>1)</sup>。

この「生命主義」という名称に、この思潮の隆盛が見られた大正期の年号名を付したものが「大正生命主義」である。つまり大正生命主義とは、『生命』の自由な発現を求める二〇世紀初頭の思潮<sup>2)</sup>であり、科学的実証性に対して懐疑的姿勢をもち、人知を超えた生命力を標榜するところから、「大正神秘主義」とも呼ばれることもある。

日本におけるこの思潮は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソンが『創造的進化』(一九〇七)で提出した、「生命力が自由にランダムに

発現することによってこそ文化が創造的に発展する、というヴィジョン」に代表される、「近代の思想の枠組みを根本的に超えようとする……二〇世紀初頭の哲学や思想の傾向」が「日本にも受け入れられて誕生した」<sup>2)</sup>。

鈴木氏らの研究の対象となっているのは主に文学者、哲学者だが、大正初期から興隆を見せた新しい教育論の流れの中にも、この生命主義の影響が見られる。大正三年に発刊された『新時代の教育』において成瀬仁蔵は、「自ら生きんと欲するの意志」の尊重を説き、次のように言う。

吾人に此の根本生命あり。故に吾人が生命の要求に向かつて動くに当りては、其の動くに従つて涸る、ことなき慧智となりて現はれ、要求をして満足しむべき、一切の方法を備へ、万般の手段を設け、滾々として尽くるの期なし。<sup>3)</sup>

「根本生命」に向かつて行動すれば「一切の方法を備へ」た「慧智」があらわれるという考え方に、「生命」の自由な発現をとなえる生命主義との親近性が見られるものである。さらに成瀬は「人格的生命根本の動力」について「満足は唯自家の真要求に聴いて、切々自ら創造建設する所に於てのみ、始て発見せらるゝものなることを、思はざるを得ざるべし。……自己の人格的生命に生くるの人は、又自ら運命を作るの人なり。彼は其の根本の要求に聞いて生活し、根本本能の内発力よりして自己の幸福を生み、自己の功業を成就す。」と主張し、「自己人格の価値を如何に尊貴崇高なるか」、「自己の生命力を如何に強大偉麗なるか」を知らしめることが教育の目的であり「教育は此の根本

の自覚自信を得しむるより急なるはなし」と結論する。

成瀬の強調する「根本生命」、「人格的生命根本の動力」といった用語のニュアンスが、「生命」という概念を世界観の根本原理とする、大正生命主義における「生命」という用語のニュアンスに一致しているのを確認できる。

また大正期文芸教育論の論客の一人であった片上伸（天弦）は、「往々にして教育の方面からは、文芸は危険有害なものとして、更に甚しきは恐るべき誘惑として排斥せられてゐる傾きがある」のを嘆き、「しかしながら、真の文芸は、教育の方面から見て、勿論危険有害なものではあり得ない」としながら次のように言う。

文芸は人間生活に対する寛大な、余すところなき、細やかな包容力と、自ら癒す生命の力の尊さに対する信頼の念とを養ふものである。<sup>4)</sup>

片上の言う「生命」概念の眼目は、「自ら培ひ自ら癒やす力の、一種神秘的のはたらきを信ずる」<sup>5)</sup>ところであり、成瀬の言う「生命」と同様、人知を超えた力の発現をめざしている。そして片上もまた右の教育論の中で、成瀬の言う「自ら生きんとするの意志」に通ずる「人間の生きんとする意欲」という言い方をしているのであり、「人間の生きんとする意欲」すなわち「人間生活に対する寛大な包容力と、中心生命の力の尊さに対する信頼の念」<sup>6)</sup>を養うのが教育の目的だと結論する。成瀬、片上の論の類同性は、両者がある同じ思潮の中に身を置いていたことの証左であろう。

教育論の分野で論陣を張った片上伸（天弦）は、自然主義陣営にありながら自己主観を重視した批評家でもあった。「文学成立の源を訪ねても、またその究極するところを考へても、所詮文学は自己を語り自己を表白するものである」と言う片上はまた、次のように言う。

自己の批評は必ず自己の創造と一つになる傾向と動力を有するものでなくてはならぬ。……批評心の深き鋭き強きは、自己の生命の深き鋭き強きであらねばならぬ。強い深い鋭い生命の力でなければ、自分をも他をも所有することは出来ない。

批評においても片上は「強い深い鋭い生命の力」を重視する。先にあげた成瀬仁蔵の、「根本生命」の「要求に向かつて動」けは「涸る、ことなき慧智」があらわれるという主張と、次の片上の言葉とをひき比べて見ると、批評家片上伸の主張にも、教育論における生命主義と通底する姿勢が読み取れる。

個性をして謙遜誠実ならしめる深刻な批評精神と、それが、必然に伴うてゐる自己の現実を熱愛する力とが内に溢れるに至つて、初めて表白が自然なものの統一あるものとなつて来る。

文学者の「表白」が、「現実を熱愛する力」をもてば「自然なものの統一あるもの」になるという主張には、一見片上とはかけ離れたところにいる小林秀雄の文壇デビュー作「様々なる意匠」（昭和四年）をはじめとする初期批評作品を思わせる考え方を含んで

いる。小林は「生命」という語をキーワードとして用いているわけではないが、「兇暴な現実の夢に貫かれてゐる」作品、「眼前に生き生きとした現実以外には何物も欲しなかつた」作家を肯定している。

もちろん、「批評の対象が己れであると他人であるとは一つの事であつて二つの事でない。批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語る事ではないのか。」という小林の有名な一節と、「文学者」の「表白」を言う片上の言葉をただちに結びつけてしまうことはできない。しかし「根本生命」の発現を主張する片上および成瀬の考え方と、小林の発想はその根底で近いところにある。

小林は次のように言う。

凡そあらゆる観念学は人間の意識にけつしてその基礎を置くものではない。マルクスが言つた様に、「意識とは意識された存在以外の何物でもあり得ない」のである。或る人の観念学は常にその人の全存在にかゝつてゐる。その人の宿命にかゝつてゐる。……

観念学を支持するものは、常に理論ではなく人間の生活の意力である限り、それは一つの現実である。（「様々なる意匠」）

小林秀雄の言うのは人間を動かしている、「意識」をこえた原動力であり、それが「その人の全存在」、「その人の宿命」、「人間の生活の意力」と言い換えられる。意識をこえた何か、その人間のものの考え方の方の根本にあるということである。この、超意識的な原動力とでも言うべきものを小林が意識していたことを、次の一節からも看取できる。

詩人は如何にして、己れの表現せんと意識した効果を完全に表現

し得ようか。己れの作品の思いも掛けぬ効果の出現を、如何にして己れの詩作過程の裡に辿り得ようか。……恐らくここに最も本質的な意味で技巧の問題が現れる。だが、誰がこの世界の秘密を窺い得よう。たとえ私が詩人であつたとしても、私は私の技巧の秘密を誰に明し得よう。

（様々なる意匠）

こうした小林の発想が、和辻哲郎『ニーチェ研究』（大正二年）に負うところ大である点を、以前に拙稿で論じた。<sup>10</sup> たとえば次のような箇所はその痕跡が見られる。

意識は吾人にとつて最も確実な事実であり凡ての研究の出発点であるとせられた。ニーチェはこれに対して最も確実なのは意識の事実ではなく意識を通じてその奥底に活らいてゐる生活の力ではなからうかといふ問題を提出した。<sup>11</sup>

ニーチェのいふ本能は、感覚や恣意の内に動力とし評価者としてひそみ全然原子的に相互の連絡を欠いてゐる所の意識に対して、方向と活力とを与へるものである。権力意志である。神秘的な直接的な内的事実である。純粹なる心的活動はニーチェにあつては人間の全的活動に外ならぬ。<sup>12</sup>

右で和辻はニーチェの「権力意志」を「人間の全的活動」「生活の力」と言い換えている。先に引用した箇所でも小林は、自らの言うところの「宿命」を「その人の全存在」的働き、「生活の意力」と言い換える。そしてどちらも、人間の意識をこえた原動力をあらわすものとして、これらの語を用いている。用語の上でもその用法の上でも両者の類同性は高い。

以上をひとまずとりまて言えば、和辻の説くニーチェの「権力意志」と、小林の説く「宿命」の語義は、成瀬仁蔵の説く「人格的生命根本の動力」および片上の説く「自ら癒やす生命の力」の語義と一致するわけである。

### 3

ここで、片上伸もまた「人間の生きんとする意欲」という言い方をし、「生活」という語を多用していたことを思い起こしたい。片上は「人間の生活が、複雑微妙な生活意欲の集合して造りなせる一大交響楽であること」を主張しつつ次のように言う。

文芸は、人間生活の一切の意欲を断片的に小刻みにして、或る部分を避けたり抑へたりしながら、こはこは人間生活を生きていかうとするものではないのであるから、即ち一切の人間生活の意欲を抑殺せずして、総てを十分に生かすことによつて根本の生活を強く逞しくして行かうとするのであるから、どんな人間生活の渦巻の中へも、その人間の力を十分に現して行くために喜んで進んで行くのである。<sup>13</sup>

ここに見られる「根本の生活」「人間生活の意欲」といった用語が、和辻および小林の使う用語に形の上でも類同性があり、その意味ニュアンスにおいても類同性がある点に注目したい。小林の「生活の意力」は片上の「人間生活の意欲」とかなり近い位置にある。

和辻が解説するニーチェの「権力意志」は、意識以前の場所で動いている、人間の生きようとする力をさしている。この概念は、教育論

における「生命の力」と共通する意味内容をもっている。生田長江訳『ニーチェ全集』には次のようにある。

要するに、意識されるところの一切の物は、一の現象であり、一の結論であり、——そして何物の原因ともならない。<sup>14</sup>

意識的生活の全体は、魂を伴へる、温情を伴へる、徳を伴へる精神は、抑もそれは何への奉仕に於て働くか？ 動物的根本機能に對する手段（栄養を取り、又高い階段へ進む為めの）のあり得べき最大の完全化に於て。とり分け、生命の挙揚。<sup>15</sup>

「意識」されたものは「原因」ではない。「意識的生活」はとりわけ「生命の挙揚」、その「最大の完全化」に奉仕するものである。「生命」こそが根本動機である。

生命主義的な教育論におけるキーワードであった「生命」は、ニーチェ思想においても同じくキーワードであり、両者の意味ニュアンスもきわめて近接している。「根本生命」の「要求に向かつて動」けば「涸る、ことなき智慧」があらわれるのであり、「自己の生命力を如何に強大偉麗にするかが重要だ」という成瀬仁蔵の主張を今ひとたび思い起こしたい。

和辻は次のように解説する。

感覚や思惟は凡て権力意志によつて内から動かされてゐる。権力意志は生物学の云ふ生活の意味ではなく、直接にそれ自らとして生きらるべき根本の生命である。感覚や思惟に先天的に活かいてゐるのは知力の形式ではなくこの生命の力である。認識を説明するためには必ず認識以上の立場即ちこの生命の力から出発しなけ

ればならぬ。<sup>16</sup>

右で「根本の生命」は「知力の形式ではなく、この生命の力」と言い換えられており、片上の言う「根本の生活」と語義を同じくするのがわかる。たとえば片上はその教育論で、「年少の子弟は、……先ずその一切の意欲を如何にして思ふままに伸び行かしむべきかを、無意識のうちにも最も重大と感じて居る者である」と主張している。この根本の生活意欲を「如何にして思ふままに伸び行かしむべきか」を重視する片上の姿勢は、『ニーチェ全集』にある「意図にもとづく総ての現象は、権力を増大する意図に帰してしまへる」、すなわち意図的な現象の根本に「権力意志」があるという一節と発想を同じくするものである。

「権力意志」を、和辻は「神秘的な直接的な事実である」とも言い換える。ニーチェ思想と、生命主義的教育論が、極めて近い位置にあるのを確認できる。

#### 4

小林秀雄と、ニーチェ思想及び生命主義の関係をさらに見ていく。「根本の生命」、「神秘的な直接的な事実」といった言い方そのものが小林秀雄に見られるわけではない。しかし次のような言葉に、それらと同じ発想がうかがえる。

作家は、己れの情熱に関して、どんな精密な意識を持たうと、これが制作といふ行動に移る時には幾多の無意識を許さねばならぬ事も知つてゐるのだ。（「アシルと亀の子II」昭和五）

作者を、本當に動かし導いたものは、彼のよく知つてゐた當時の思想といふ様なものではなく、彼自らはつきり知らなかつた叙事詩人の伝統的魂であつた。彼自ら知らぬ処に、彼が本當によく知り、よく信じた詩魂が動いてゐた……（「平家物語」昭和十七）  
右と、和辻によるニーチェ思想の解説を引き比べる。

生理学者や哲学者は意識の明度を以て確實の度を量り、最も冷靜な論理的思考を最も尊重するのであるが、ニーチェは意識として明らかならざる物ほど生活の深味を暗示するとしている。凡て人間の活動には意識以上のものが根本動力となつて活らいてゐるので、これなくしては例へば芸術の創作や恋愛などを根本的に了解することは出来ない<sup>19)</sup>。

和辻の言う「意識として明らかならざる物ほど生活の深味を暗示する」という考え方と、作者が「彼自ら知らぬ処に、彼が本當によく知り、よく信じた詩魂が動いてゐた」という小林の考え方に類似の発想を見ることが出来る。また和辻が説くニーチェの、「意識以上」の「根本動力」なくしては「例へば芸術の創作や恋愛などを根本的に了解することは出来ない」という考え方と、小林の「芸術家が各自各様の宿命の理論に忠実である事を如何ともし難い」のであり、この「作者の宿命の主調低音をきく」のが批評家のあるべき姿だとする主張（「様々なる意匠」）の根底にある考え方との間にも類似性がある。両者とも、意識の奥底で人間を突き動かす力を想定している。

片上伸は『文芸教育論』で言う。

科学は常に進歩發達を期してをるため昨日の真理は最早今日の真

理ではない。……此外形的真理に対して別に内部的真理があると爲し、それは智を支配する頭腦に依て、はたなく情を支配する心臓に依て生ずるものである。悟得せられるものではなく感得せられるものである。而かも決して間違のない直覚的のものであるとしてをる。学校では如何なる材料も如何なる発表も又如何なる練習も此内部的心理の下に立たなければならぬ<sup>20)</sup>。

「外形的真理」を排し、「内部的真理」すなわち「智を支配する頭腦に依て、はたなく情を支配する心臓に依て生ずるもの」あるいは「悟得せられるものではなく感得せられるもの」を称揚するところが、和辻による「感覚や思惟に先天的に活らいてゐるのは知力の形式ではなくこの生命の力である<sup>21)</sup>」というニーチェ思想解説と重なり合いを見せている。

芸術は悟性より感性、という一般論が偶然重なつただけだとも受け取れるが、ここで言う「感得せられるもの」を片上が「生命の力」と同一視している点と、和辻が「知力の形式」と対比しつつ「生命の力」を称揚している点とに、偶然と言いがたい一致が見られる。

小林秀雄は「普遍性」、「眞の世界」と対比させつつ芸術における「人間情熱」に注意を促す。

ここで私はだらしの無い言葉が乙に構へてゐるのに突き当る、批評の普遍性、と。だが、古来如何なる芸術家が普遍性などといふ怪物を狙つたか？

（中略）

芸術の性格は、この世を離れた美の国を、眞の世界を、吾々に見

せて呉れる事にはなく、そこには常に人間情熱が、最も明瞭な記号として存するといふ点にある。

(中略)

吾々が彼等の造型に動かされる所以は、彼等の造型を彼等の心として感ずるからである。

(「様々なる意匠」)

右も単なる感性主義の言葉と見ることもできようが、しかし小林の言う「人間情熱」は、芸術家にとって「彼自ら知らぬ処に」動いている「詩魂」であり、芸術家自らは意識化できない働きである。「確かなものは覚え込んだものにはない。強ひられたものにある」(「新人Xへ」昭和十)と小林が言うのも、意識よりも意識をこえた原動力に注意を促しているのであり、一見偶然の一致に見える片上・和辻の文脈と小林の文脈との類似性の底には、同じ発想がある。

さらに和辻の言葉を示す。

ニイチェの見たる芸術家は、斯くの如く、科学を以て明かにすることの出来ない境地より出でて創作する。……芸術創作を外面より見れば種々不純なものを含んでゐる様であるが、芸術家の内生活より見れば最も純粋な美的活動である。自己目的なる生命の高潮とその必然性の表現とである。もしさうでないとなれば、それは真の芸術創作ではない。<sup>22)</sup>

「科学」より心情、という一般論に過ぎないように見えるが、「芸術創作」を「生命の高潮」としてとらえる、その用語の使い方に特徴がある。和辻の言葉が、「生命」を根本原理として科学的実証性をのりこえようとした「生命主義」の潮流と、同じ思想的文脈の中にある事

実を示している。くり返すがこのように、生命主義的教育論と和辻のニイチェ解説には同じ用語が頻繁にあらわれる。またその用語の用法においても両者には明らかな共通性がある。<sup>23)</sup>

## 結び

大正期の生命主義的教育論、ニイチェ思想、小林秀雄の批評の三者に共通する用語、およびその用法がある点を見てきた。「生命根本の動力」「根本生命」といった用語において教育論とニイチェ・和辻は共通性を持ち、「その人の全存在」、「人間の全的活動」といった用語で小林秀雄とニイチェ・和辻は共通性を持ち、また「生活の意力」、「生活の力」、「人間生活の意欲」といった用語で三者は共通性をもっていた。そして三者とも、意識をこえた原動力のようなものが、人間生活の根本にあるという考え方を示している。その原動力を高め強めるところに三者の眼目がある。

以上より、何らかの、三者に共通する思想的根底があったと考えるのが妥当である。生命主義と、特に和辻の説くところのニイチェ思想に親近性があり、その思想的文脈の中に、小林の批評の発想もあつたと考えられるわけである。

次に示すのは横山栄次の芸術教育論である。

賞翫とは如何なることかと云ふに、芸術品の作者が其芸術的活動を為すときと同じやうにその心持を進めて行くことである。<sup>24)</sup>

次に、和辻のニイチェ解説を示す。

ニイチェは美学の多くが受くる者、即ち鑑賞者の側より人間の美的

活動を見やうとするのを攻撃し、鑑賞も亦間接の創作である故に、美学は必ず創作者即ち与ふる者の側より出立しななければならない、とするのである。<sup>(25)</sup>

小林は次のように言う。

観念的美学者たちは、芸術の構造を如何様にも精密にする事が出来る、なぜなら彼等にとつて結局芸術とは様々な芸術的感動の總和以外の何物も意味してはゐないからだ。実証的美学者等は、芸術がこの世に出現する法則に就いて如何様にも正確な図式を作る事が出来る、何故なら、彼等にとつて芸術とは人間歴史が産む様々な表現技術の一種に他ならない為である。然し芸術家にとつて芸術とは感動の対象でもなければ思索の対象でもない、実践である。作品とは、彼に取つて、己れのためたる里程碑に過ぎない、彼に重要なのは歩く事である。  
（「様々なる意匠」）

小林は創作活動を行う芸術家の側に立ち、その創作現場の活動に視点を定めている。その創作現場の活動を「実践」という言葉で言いあらわしている。小林の言う「実践」は、榎山の言う「芸術品の作者が其芸術的活動を為すときと同じやうにその心持を進めて行く」ような「賞翫」を称揚するための語であり、また和辻の言う「創作者即ち与ふる者の側より出立」するような「美学」を称揚するための語である。

また榎山は言う。

賞翫者は自ら創作し得ざる代りに批判を為す。批判は賞翫の最後の作用である。要するに芸術家は其自我を作品の上に表はすに對して賞翫者は其自我を批判の上に表はすものである。<sup>(26)</sup>

小林は「ポオドレールの文芸批評を前にして、舟が波に掬われる様に、繊鋭な解析と潑刺たる感受性の運動に私が浚はれて了ふといふ」体験を語りつつ次のように言う。

この時、彼の魔術に憑かれつつも、私が正しく眺めるものは、嗜好の形式でもなく尺度の形式でもなく無双の情熱の形式をとつた彼の夢だ。それは正しく批評ではあるが又彼の独白でもある。

（「様々なる意匠」）

「無双の情熱の形式をとつた彼の夢」が彼の「批評」であり「彼の独白」である。この小林の言葉と、さらに次の和辻の言葉をひき比べる。

芸術創作は高められたる生活として説かれる。芸術鑑賞も亦この芸術創作の弱い場合である。……強烈なる生命表現の芸術に接する時、鑑賞者の生命は力を受けて興奮し、その芸術に自己の表現を見るのである。<sup>(27)</sup>

小林の「無双の情熱の形式をとつた彼の夢」は、表現こそ違うが和辻の「強烈なる生命表現」に通じる意味合いをもっており、しかもそれに接した「鑑賞者」はその芸術に芸術家の「自己の表現」を見る。小林がポオドレールの批評に「彼の独白」を見るように。

榎山が言うのは芸術家の自己ではなく、「賞翫者」の「自我」がその「批判の上に」あらわれるといふことだが、小林はさらに、「傑作の豊富性の底を流れる、作者の宿命の主調低音をきく」とき「私の心が私の言葉を語り始める」（「様々なる意匠」）としているのだから、やはり主張の方向は同じである。

これらの、一見偶然に見える類似も、以上見てきたような教育論、生命主義、小林の三者の発想の共通性を念頭に置くと、偶然ではない何らかの必然性、すなわち二者が同じ一つの思想潮流の中に位置づけられるという事実が認められるのである。

注

- (1) 鈴木貞美編『大正生命主義と現代』河出書房新社 平成七年三月三〇日
- (2) 鈴木貞美『生命』で読む日本近代』日本放送出版協会 平成八年二月二十五日
- (3) 成瀬仁蔵『新時代の教育』博文館 大正三年一月三十一日
- (4) 片上伸『文芸教育の提唱』大正九年十月『文芸教育論』文教書院 大正十一年九月十日
- (5) 片上伸『文芸教育の意義』大正九年十月『文芸教育論』
- (6) 同
- (7) 片上天弦(伸)『自己のための文学』(『東京二六新聞』明治四一年十一月十一日)
- (8) 片上伸『告白と批評と創造と』(『文章世界』大正二年十二月)
- (9) 片上伸『現実を愛する心』(『文章世界』大正二年一月)
- (10) 拙稿『初期小林秀雄の思想形成——ニーチェ「力への意志」と『宿命』』(『稿本近代文学』平成六年十一月)
- (11) 和辻哲郎『ニーチェ研究』東京内田老鶴圃 大正二年 六二頁
- (12) 『ニーチェ研究』六六頁
- (13) 片上伸『文芸による人間の教育』大正十年三月(『文芸教育論』)
- (14) ニーチェ『権力への意志(下)』四七八節(生田長江訳『ニーチェ全集第八篇』新潮社 大正十四年)
- (15) 『権力への意志(下)』六七四節
- (16) 『ニーチェ研究』八六頁

- (17) 『権力への意志(下)』六六三節
- (18) 『ニーチェ研究』六七頁
- (19) 『ニーチェ研究』六六頁
- (20) 『文芸による人間の教育』
- (21) 『ニーチェ研究』八六頁
- (22) 『ニーチェ研究』三一九頁
- (23) ニーチェの日本への紹介者の一人であり、高等師範学校の独語教授であった登張信一郎(竹風)が、明治三六年に『新教育論芸術編』(有朋館)を刊行している。これは反科学・非合理主義を称揚した独国人ラングベーン(Langbehn, Julius, 1851-1907)の『教育者としてのレンブランド』(Rembrandt al Erzieher, 1890)の訳であった。「反科学・非合理主義」は生命主義の特徴でもある。
- (24) 槇山栄次『新教育論』目黒書店 大正十四年二月十三日
- (25) 『ニーチェ研究』三二四頁
- (26) 『新教育論』
- (27) 『ニーチェ研究』三三二頁

【付記】

本稿は、佛敎大学平成十二年度特別研究助成(個人特定研究)による成果である。

(ありた かずおみ 国文学科)  
二〇〇〇年十月十八日受理